

露地栽培におけるニホンナシ発芽不良軽減のための管理技術

露地栽培のニホンナシ発芽不良は、10月の施肥を中止し、短果枝、予備枝由来の長果枝を使用することで発生を軽減できる

研究開発の背景

2009年春期にニホンナシの発芽不良が西南暖地を中心として広域的に発生した。本障害はこれまで加温ハウス栽培でみられていたが、この年の発生は露地栽培が中心であり、原因が不明である。そのため、ニホンナシの露地栽培において、発芽不良の軽減技術を明らかにする。

研究成果の内容

発芽不良軽減のため、10月施肥の中止、短果枝、予備枝由来の長果枝を使用



ポット試験により、10月に肥料を施用すると、発芽不良が多発することを確認。

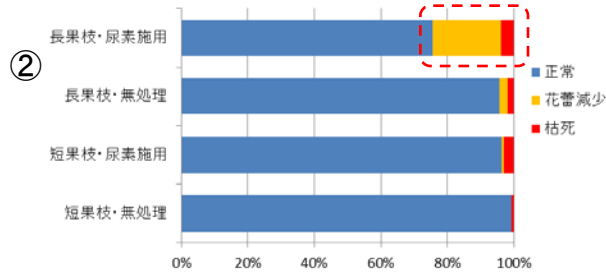


図1 '新高'における10月尿素施用による長果枝、短果枝の発芽状況

成木による試験により、10月に肥料を施用すると、長果枝に発芽不良が増加することを確認。

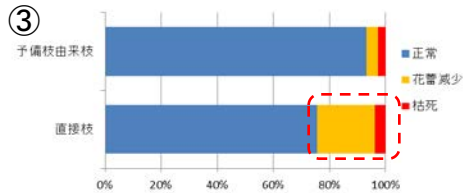


図2 '新高'長果枝における直接枝と予備枝由来枝の発芽状況

長果枝の中では、予備枝由来枝より直接枝の方が発芽不良の発生が多い。

発芽不良を避けるには、①②③より、
・10月に肥料の施用を中止
・短果枝を利用
・もしくは予備枝由来の長果枝を利用

導入メリット

発芽不良頻発園では

多発年は収穫80%減収。
少発年は収穫20%減収。
5年に1回多発年。収穫量は年平均32%減収。

産地全体では

多発年は約10%減収。
少発年は約2%減収。
5年に1回多発年。産地全体で年平均3.6%の減収。

対策の実施により被害が半減すると

年平均16%の減収分の収益確保

年平均1.8%の減収分の収益確保



対策なし



対策あり

期待される効果

・発芽不良の発生が軽減されることで着果が安定し、ナシ生産・経営の安定が可能となる。

導入をオススメする対象
ナシ発芽不良発生園をもつナシ生産者